

SHOW HEYシネマルーム

★★★★★

私の愛、私のそばに

2009年・韓国映画
配給/ブロードメディア・スタジオ
121分

2010(平成22)年12月6日鑑賞

角川映画試写室

Data

監督・脚本：パク・チンピョ
出演：ハ・ジウオン/キム・ミョン
ミン/ナム・ヌンミ/イム・
ハリョン/チェ・ジョンニユ
ル/シン・シネ/イム・ジョ
ンユン/イム・ヒョンジュン
/イム・ソンミン/ソン・ガ
イン/カン・シニル

👁️👁️ みどころ

難病モノはもう飽きた。確かに邦画のそれはそうだが、韓国映画の本作は別！それは『ユア・マイ・サンシャイン』（05年）のパク・チンピョ監督が描く「純愛」を越えた大人の愛の演出力と、2人の俳優の演技力のおかげ。

キム・ミョンミンの激ヤセカとその演技にも脱帽だが、美女好きの私の注目は何といてもハ・ジウオン。26歳の時の『ボイス』（02年）も『セックス イズ ゼロ』（02年）も良かったが、本作の彼女は最高！こりや必見！ちなみに、必ずハンカチは手もとに・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■また、難病もの？そう思って行ったが出る時は？■□■

涙を誘う「難病モノ」の代表は、韓国では『私の頭の中の消しゴム』（04年）（『シネマルーム13』128頁参照）、日本では『世界の中心で、愛をさけぶ』（04年）（『シネマルーム4』122頁参照）。しかし、最近試写の案内をもらった「難病モノ」は、邦画では『僕と妻の1778の物語』（10年）、韓国映画では本作。しかし、その他にも多くのものを観ているから、最近は少し食傷気味で、ノーサンキュー状態？しかし、竹内結子はまだしも草薙剛主演の『僕と妻の1778の物語』はノーサンキューだとしても、09年に約220万人を動員し、キム・ミョンミンが韓国で最も権威ある映画賞である大鐘賞と青龍賞の主演男優賞を、ハ・ジウオンが青龍賞の主演女優賞を受賞したという本作は、やはり観ておかなければ・・・。

また、ハ・ジウオンは『ボイス』（02年）（『シネマルーム2』234頁参照）ではその「超美人」ぶりにうっとりし、『セックス イズ ゼロ』（02年）（『シネマルーム8』2

7頁参照)ではエアロビクス部のエースに扮して披露してくれたその美しい肢体にうっとりした女優だから、その7年後の本作は観ておかなければ……。私がハ・ジウォンを観たのは、その他に『恋する神父』(04年)、『シネマルーム8』16頁参照)、『デュエリスト』(05年)、『シネマルーム10』117頁参照)で、この2作ともその美しさは健在だったが、さて本作では?

他方、キム・ミョンミンは本作で「激ヤセ」演技をみせるそうだが、激ヤセ演技でビックリしたのは、クリスチャン・ペイルが30kg近く減量したという『マニスト』(04年)、『シネマルーム7』382頁参照)。女優に比べて男優の方にはあまり関心がないのは仕方ないが、私がキム・ミョンミンをみるのは本作がはじめて。まあ、1度くらいは見ておかなければ。

私は今回その程度の気持で試写室へ行ったのだが、「また、難病モノ?」とは決して言えないその魅力にノックアウト!わかり切ったお涙ちょうだいのストーリーで涙なんか……。そう思っていたのだが、試写室を出るときには?

■■■難病モノだが、「純愛」越えが素晴らしい!■■■

吉永小百合、浜田光夫コンビによるかつての『愛と死をみつめて』(64年)、『シネマルーム21』86頁参照)以降、難病モノの定番は「純愛」。したがって、そこでは男女2人の関係は清いまが当然。ところが本作では、葬儀社の娘として女ながらに『おくりびと』(08年)、『シネマルーム21』156頁参照)の主人公のように甲斐甲斐しく働いているイ・ジス(ハ・ジウォン)は、バツ1の出戻り(もともと、これは真っ赤なウソで、ホントはバツ2?)と設定しているうえ、ルー・ゲーリッグ病とも呼ばれるALS病に冒され余命数年というペク・ジョンウ(キム・ミョンミン)の下半身が動かかれないかを1つのテーマとしている(?)ところが面白い。

また、もともと2人は幼い頃同じ町で暮らしていた顔見知りだから、美しいジスにジョンウがモーションをかけたのは理解できるが、そんなジョンウのアプローチにジスが応えるきっかけが面白い。それはある日の居酒屋での会話だが、ジスはいつも仕事で死者を清めている手を周囲の人から「縁起が悪い」と言われているのが苦痛。したがって、ジョンウから「世界一きれいな手だ」と言われると、それだけで……。?ジスはかなりの酒飲みらしいが、酔った勢いで(?)ジョンウをホテルに誘う姿も微笑ましい。また、その後妊娠を心待ちにしているジスの姿が登場するから、ジョンウの「ボクは動かない」というのは真っ赤なウソだったことがわかるが、さて病室内での2人のエッチは?

『ユア・マイ・サンシャイン』(05年)、『シネマルーム11』257頁参照)で見事な演出をみせたパク・チンピョ監督だが、本作では難病モノ=純愛にこだわらず、大人の男と女の演出を巧みに取り入れたところがお見事。これによってジスの魅力がより輝いたから、不思議なものだ。

■この6人部屋は人間ドラマの宝庫！■

2人きりの結婚式を挙げた後のジョンウの病室は個室だったから、病魔との闘いは大変だったが、病室内におけるエッチを含め、まだまだ2人の生活は楽しさでいっぱい。しかし「ある事件」によってジョンウの症状が急に悪化すると、その後ジョンウは重症患者ばかりを集めた6人部屋に。そこで私が疑問に思ったのは、なぜ重症になると個室ではなく6人部屋に？そりゃ逆じゃないの？ということ。その理由は、きっとおカネ・・・。

それはともかく、パク・チンピョ監督は、この6人部屋に収容された重症患者たちとその家族たちが織りなす人間ドラマを、ジョンウとジスの「純愛」とはまた違う角度から濃密に描いていく。それは、①昏睡状態の美貌の妻パク・チュンジャ（イム・ソンミン）を眠れるお姫様のように崇める中年男パク・グンスク（イム・ハリョン）、②意識の無い植物人間状態の夫（チェ・ジョンニユル）を看護しながら、ジョンウのことも気にかけてくれるオギョンおばさん（ナム・ヌンミ）、③練習中に脊髄を痛めてスケート選手の道が絶たれ、心が荒みきった少女ジニ（ソン・ガイン）とその母親（シン・シネ）たちが織りなすドラマだが、たとえば隣のベッドで横たわっている少女ジニとジョンウとの大ゲンカ（ロゲンカ）はもちろん深刻だが、いかにも韓国的で面白いから注目！

ちなみに、ここでの弁護士の注目点は、韓国でも安楽死が法的に認められていないため、植物人間状態のまま何年も入院している場合、家族は多額の入院費を負担し続けなければならないこと。植物人間状態の患者ペ・ソクチュン（イム・ジョンユン）の弟であるペ・ソグオン（イム・ヒョンジュン）の「もう殺してやってくれ」との叫びを、私たちはどう受け止めるべきなのだろうか？まさにこの6人部屋は、人間ドラマの宝庫だ。

■演技力に裏づけられたハ・ジウォンの魅力にぞっこん！■

本作はパク・チンピョ監督の演出力も、キム・ミョンミンの演技力も見事だが、演技力に裏づけられたハ・ジウォンという女優の魅力にぞっこん！先日観た『ゴースト もういちど抱きしめたい』（10年）の演出はイマイチだったが、松嶋菜々子の今なお変わらない魅力だけで星4つをつけてしまったように、私はずっと美人女優には弱い。本作は冒頭からラストまでハ・ジウォンの魅力にぞっこん！元気にふるまっている時のクルクルと変わる顔の表情や酒の酔いを借りながら本音を語る演技もいいし、涙を流す顔もホントにいい。本作で印象に残る服装は、冬の浜辺でジョンウとチークダンスを踊る時の赤いコート姿とラストシーンに向けてベッドの前で歌い踊る時のアイドル歌手のような姿。そして、本作のクライマックスで感心するのは、「死なないで！逝かないで！」と叫ぶだけでかなりの時間観客の目を釘付けにし、涙を流させる彼女の演技力。

彼女は1979年生まれだから、2009年の公開時はちょうど30歳。今が一番女性として魅力的な時期なのだろう。26歳の時の『ボイス』も『セックス イズ ゼロ』も

良かったが、私は本作における演技力に裏づけられたハ・ジウォンの魅力にぞっこん！

■□□口を利けなくなつてからの会話とは？■□□

私は本作ではじめてALSという病気の恐ろしさを知ったが、やせ細り筋肉が動かなくなつていくだけでなく、怒ったり泣いたりという感情のコントロールすら難しくなつていくというから大変。余命いくばくもないこと明らかなジョンウと結婚し一生ジョンウの側に寄り添うと決心したジスが、ジョンウに宣言したのは「私がいたいと思う間だけ、あなたのそばにいてあげる」という言葉だったが、それを額面どおり解釈してはダメ。そこに何とも深い愛が含まれていたことは、進行していく病状に絶望し、わざとジスに対してつらくあたるようになったジョンウに対するジスの対応をみればよくわかる。ここらあたりが、ラストに向けての泣かせ所だが、パク・チンピョ監督はクライマックスではさらなる泣かせ所を。

それは、いよいよ全身が動かなくなり、口すら利くことができなくなつてしまつてからのジョンウとジスの「会話」。といっても、その直前にはどうしようもない争いの結果、一時的に2人は離れてしまったのだが、再び戻ってきたジスと今や口を利くことさえできなくなったジョンウとの涙を誘う「会話」とは？なるほど映画とは便利な芸術だと感心しつつ、パク・チンピョ監督の演出力とハ・ジウォンの演技力に感動。アホバカバラエティーのお笑い芸人たちは大げさに身体を動かし、拍手しながら大声でしゃべりまくっているが、ベッドの上に横たわり身体を動かすことはもとより、口すら利けなくなつたジョンウは一体どんな演技でジスとの「会話」を？激ヤセの努力賞のみならず、クライマックスに向けてのそんなキム・ミョンミンの演技をみれば、大鐘賞と青龍賞の主演男優賞受賞も当然だ。

ジョンウとジスの純愛（大人の愛）はホンモノだったが、気の強いジスと口の悪いジョンウはお互いの「照れ」によって言えなかった言葉があつたかもしれない。ジョンウのそれは「ありがとう」であり、「愛してる」だったはずだが、今ジョンウの口からは・・・？そんなクライマックスの後、最後に登場するのは黒いネクタイをしめ、『おくりびと』の主人公と同じくジョンウに対して丁寧に死化粧を施すジスの姿だが、その顔にはもう涙はなかった。ここまで十分に命を燃やしつくしてジョンウを愛しぬいたのだから、そりゃ当然だろう。私たちはその凛とした美しさのジスに注目だが、ジスはきっと自分が葬儀社の娘であることに感謝しつつ、ジョンウと最後の抱擁をしたことだろう。

2010（平成22）年12月7日記